

平成 30 年 10 月 17 日現在

機関番号：33701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750253

研究課題名(和文) 体育科教育における「体育理論」の教科内容構成論

研究課題名(英文) The Content Structure of "the Theory of Physical Education" in Pedagogy of Physical Education

研究代表者

伊藤 嘉人 (ITO, YOSHIHITO)

岐阜経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：50409299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本ならびにイギリスの中等教育学校における体育の知識学習について理論的・実践的に明らかにし、その研究成果に基づいて義務教育で教えるべき「体育理論」の教科内容を構成することを目的とすることであった。研究成果は以下の通りである。

(1) イングランドGCSE-PEにおける内容構成の意義と課題を明らかにした。(2) 「キー・コンピテンシー」の視点から中学校「体育理論」における学習内容の課題を明らかにした。(3) 「体育理論」領域におけるオリンピック教育の授業内容を構成する原理を明らかにした。(4) 運動・スポーツ文化の主体者を形成する「体育理論」の授業構成の原理を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the knowledge of physical education at secondary school in theoretical and practical way and configure the content structure of "the theory of physical education".

Main discussions of this study are summarized as follows; (1) It is considered the significance and task of the content structure of English GCSE-PE. (2) It is clarified the learning content of the theory of physical education in secondary school from the viewpoint of "key competency". (3) It revealed the principle that constitutes the content of the Olympic education. (4) It is built the principle of the class composition of "the theory of physical education" for forming the knowledge of movement and sport culture.

研究分野：体育科教育学、スポーツ教育学

キーワード：体育理論 教科内容構成 授業内容構成 オリンピック教育

## 1. 研究開始当初の背景

2008年改訂の学習指導要領(以下、要領)における体育の知識に関わる内容は、近年のPISA調査の結果をはじめ、先進諸国の教育改革の影響より見直された。今日、体育の学習は身体活動を通して知識の重要性を認識するとともに、実技と知識の相互の関連をふまえた授業が展開されていくことが求められている。

体育の知識学習に関する研究は、戦後「生活体育」、「からだづくり」、「運動文化論」など体育の本質論と関わって、さまざまあり方が主張されているが、1960年代の後半から体育の本質論を問う議論が急速に姿を消される。「体育理論」の研究についても本質論を問う研究ではなく、要領に沿った教材づくり、授業づくりに関する研究がほとんどであった。つまり、体育の知識や、「体育理論」についての議論は尽くされておらず、研究の遅滞を招いていることが実態である。このことから我が国において、体育の知識学習ならびに「体育理論」の研究は体育科教育学の重要な研究課題であるといえる。

また、イギリスは、中等教育(Secondary school)の義務教育を修了する資格試験のナショナル・テストとして General Certificate of Secondary Education(以下、GCSE)が位置づいている。このGCSEの科目として体育科(GCSE-PE)があり中等教育学校では、このGCSEに向けて授業が行われ、ナショナル・カリキュラム、ナショナル・テスト、教育現場と理論的実践的なシステムが構築されている。

このような教育制度として理念的・実践的に学校教育が行われているイギリスは、我が国の体育の学力をナショナルスタンダードとしてどのように担保されているか相対的に比較すべき事例として意味があるといえる。

本研究の独創性は、理念から実践まで貫いて研究を展開し、体育の知識学習として「体育理論」の教科内容構成を明らかにしようとする点にある。本研究からナショナルスタンダードとして体育科の学力や知識をどのように担保するのか、体育科のアカウンタビリティの明らかにすべく研究を遂行した。

## 2. 研究の目的

本研究は日本ならびにイギリスの中等教育学校における体育の知識学習について理論的・構造的・実践的に明らかにし、その研究成果に基づいて義務教育で教えるべきスタンダードとして「体育理論」の教科内容を構成することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、①体育の知識、「体育理論」の教科内容研究の基礎となる理論研究、②戦後日本の中学校体育における知識、教科内容として

の「体育理論」の位置、③イギリス中等教育学校における体育の知識学習の研究という3つの研究課題を関連づけ、中学校における「体育理論」の教科内容構造の創出に取り組んでいくことを計画した。

具体的には、①の研究課題では教育学ならびに体育科教育の学力論議における「知識」構造、ならびに体育における「体育理論」の教科内容の理論的根拠を明らかにする。②の研究課題としては、戦後日本の中学校体育における知識、教科内容としての「体育理論」の位置づけについて明らかにする。③の研究課題としては、イギリス中等学校における体育の知識学習、「体育理論」の研究を行う。そして「中学校における「体育理論」の教科内容構造の創出」に向け、研究を計画した。

以上の研究課題を遂行することで、中学校における「体育理論」の教科内容・教材の体系化・系統化の検討し、義務教育の出口を見据えた中学校「体育理論」の教科内容構造、理念モデルを創出することを目的とした。

## 4. 研究成果

本研究の3つの研究課題領域はそれぞれ相互に関連し合っているが、研究は順次に展開することができなかった。また、体育理論の授業内容構成の原理を先行実践から見出すことができたが、最終的に中学校における「体育理論」の教科内容構造、理念モデルを創出するには至らなかった。この点は今後の課題として残された。

しかしながら、4年間の研究活動の成果は、雑誌論文4件、図書2件の執筆、学会発表5件である(具体的内容は以下の5に提示)。

主な研究成果は、以下のようにまとめられる。

### (1) イングランド GCSE-PE における内容構成の意義と課題を明らかにした

我が国における「体育理論」の教科内容構成を相対的にとらえる視点としてイギリス中等教育である義務教育課程を修了する際の資格試験 General Certificate of Secondary Education(以下、GCSE)ならびに大学進学に向けた試験である Advanced Level General Certificate of Educationにおける体育科の関連資料、ならびにイングランドのGCSEに関わるテキストの内容を検討した。また、イングランド GCSE-PEのAwarding body 3社の関連テキストを「文化としてのスポーツの意義」に着目して内容分析を行った。イングランドの「体育理論」に関わる学習内容は、スポーツの歴史、文化、社会に関わってスポーツのポジティブ・ネガティブな面を議論するリテラシーの内容が位置づいていた。

しかしながら、テキストのみを分析する限りでは、内容に関わる理論的根拠となる記述が薄いことが明らかにされた。諸外国の中でもイギリスは、体育における知識学習の内容がナショナル・カリキュラム、ナショナル・テスト、教育現場において理論的実践的に構築されていることから、このようなイギリスの「体育理論」の研究は、我が国においての体育の知識学習ならびに「体育理論」をナショナルスタンダードとしてどのように担保し、位置づけるのか重要課題を示すものであると考えられる。また、イギリスにおいてナショナル・カリキュラムとして実施されている「市民形成」の教育と「体育理論」学習の関わりについては、研究課題を遂行するにあたり重要な示唆となると考えられた。

(上記の主要著書・論文は、〔雑誌論文〕1))

## (2)「キー・コンピテンシー」の視点から中学校「体育理論」における学習内容の課題を明らかにした

本研究は、中学校体育におけるキー・コンピテンシーを捉えるべく、体育科の知識学習の中心に位置づく「体育理論」に焦点を絞り、コンピテンシーの世界的潮流の1つとなっているDeSeCo キー・コンピテンシーの視点から2008年学習指導要領「体育理論」の学習内容を検討した。

学習指導要領における「体育理論」の学習内容の検討では、DeSeCo キー・コンピテンシーに相関性はあるものの、とりわけ「リテラシー」として形成される「相互作用的に道具を用いる」カテゴリーに重きが置かれていると読み取ることができた。我が国において、学習内容のリテラシー部分を積極的に摂取する一方で他のキー・コンピテンシーについてはほとんど注目されていないことから、「体育理論」においても3つのコンピテンシーを発達段階に応じてどのように位置づけ、各学年の学習内容を検討する必要があることが明らかになった。

教師が授業を実践するにあたりコンピテンシーならびにリテラシーの「両義性」の視点が欠けてしまうと「体育理論」の学習は、一面的な学習になると危惧される。このことからキー・コンピテンシーが一面化され別の文脈に移しかえられて教育政策や教育現場に導入されていることに自覚的であることが教師に求められる。

本研究は、DeSeCo キー・コンピテンシーの視点から中学校学習指導要領の学習内容を検討したが、実際教師が「体育理論」の授業を実践するとき、学習指導要領の単元構造を理解し、教科書や資料を用いながら具体化させる。このことから、検定教科書、教科書に関わる指導書の内容からも検討する必要があるとの研究課題も見出された。

(上記の主要著書・論文は、〔雑誌論文〕1)、2)、〔学会発表〕2))

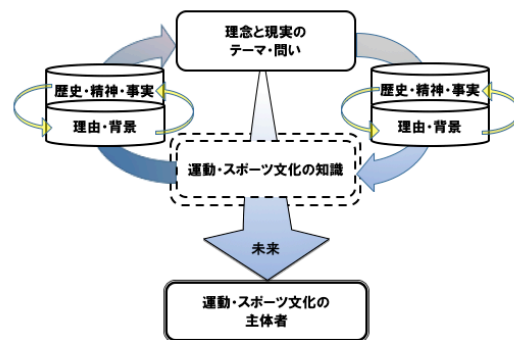
## (3)保健体育科「体育理論」領域におけるオリンピック教育の授業内容を構成する原理を明らかにした

中学校「体育理論」領域におけるオリンピック授業実践から導きだされたオリンピック・リテラシーは、オリンピックについての理念と現実の争点が生まれるテーマや問いを課題とすることが重要であると明らかになった。

本研究で見出されたオリンピック教育の授業構成のフレームワークに基づく教育実践は、オリンピックについての理念と現実の争点が生まれるテーマや問いを課題としながら、オリンピックの「精神・事実」や「理由・背景」の学びをめぐり、理念と現実との葛藤、ずれなどの思考を巡らせながらオリンピックのリテラシーが形成されると考えられる。この「オリンピック・リテラシー」は、オリンピックへの願いやこれからのスポーツを考える「未来」思考への学びとつながり、そしてその結果オリンピック文化を支える主体者を形成することが期待されることが明らかになった。

(上記の主要著書・論文は、〔雑誌論文〕1)、2)、〔学会発表〕1) 4) 5))

## (4)運動・スポーツ文化の主体者を形成する「体育理論」の授業構成の原理を明らかにした



運動・スポーツ文化の主体者を形成する体育理論の実践構造図

体育理論の授業実践における、「運動・スポーツの文化の主体者」を形成する授業構成について、先行実践から検討した。

体育理論実践から学ぶ、「運動・スポーツの文化の主体者」体育理論の知識を形成する授業の構成原理は、「理念と現実」のテーマ設定から、「歴史・精神・事実」、「理由・背景」、「未来」のフレームワークで授業を構成できると考えられた。また、このフレームワークから、図に示すような実践構想図として描くことができる。

図が示すように、授業は「理念と現実」を含み込んだテーマを課題としながら、「歴史・精神・事実」、「理由・背景」の学びをめぐり、思考を巡らせながら、運動・スポーツ

文化の「知識」が形成される。ここで形成された知識は、今後のスポーツへの願いや関わりを考える「未来」への学びとつながっていく。そして、その「未来」志向の学びは、さらに「テーマや問い」になり、深い学びとなる。このような学びのサイクルを通して、「運動・スポーツ文化を支える主体者」へと向かう、つまり「生きて働く知識」が形成されることが期待されよう。

本研究では、とりわけ社会科学的な内容の領域がテーマである、「オリンピック教育」の実践から体育理論の授業内容の構造を見出した。この「理念と現実」、「歴史・精神・事実」、「理由・背景」、「未来」からなる体育理論の授業構成は、自然科学的な内容においても活用できると考えられる。

(上記の主要著書・論文は、〔雑誌論文〕3)、4)、〔学会発表〕1) 3) 4) 5) 〔図書〕1) 2))

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- 1) 伊藤嘉人 (2014) 地域とつながる学校体育: 「市民形成」の教育を手がかりに、運動文化研究、第31号、学校体育研究同志会、pp. 1-7、
- 2) 伊藤嘉人他 (2015) 中学校「体育理論」における「キー・コンピテンシー」: 学習指導要領に着目して、岐阜経済大学論集 第48巻第3号、岐阜経済大学学会 pp. 37-46
- 3) 伊藤嘉人 (2015) 中村敏雄のデータとその生かし方: バレーボールの実践から学ぶこと、たのしい体育・スポーツ第34巻第6号発: 学校体育研究同志会 pp.54-57
- 4) 伊藤嘉人 (2018) 体育理論の授業を“生きて働く”ものにするために、体育科教育、第66巻8号、大修館書店

〔学会発表〕(計5件)

- 1) 伊藤嘉人 (2014) 今、オリンピックを学習の対象とする意味、第148回学校体育研究同志会全国研究大会
- 2) 伊藤嘉人 (2015) 「中学校体育「体育理論」領域におけるキー・コンピテンシー: 学習指導要領、検定教科書の学習内容に着目して、日本体育学会第66回大会
- 3) 伊藤嘉人 (2016) 体育理論の授業におけるわかる内容の検討、第152回学校体育研究同志会全国研究大会
- 4) 伊藤嘉人、丸山真司、玉腰和典 (2017) オリンピック教育の内容構成に関する研究: オリンピック・リテラシー、シティズンシップ教育論を手がかりに、日本教科教育学会第43回日本教科教育学会第43回全国大

会

- 5) Yoshihito Ito, Shinji Maruyama, Alexander Kuga (2017) Examining the Configuration of Olympics-related Teaching Content: Focusing on Olympic Literacy, 10. German-Japanese Symposium of Sport Science 2018

〔図書〕(計2件)

- 1) 伊藤嘉人 (2017) 学級活動・ホームルーム活動と体育・スポーツ、神谷拓編著、『対話でつくる教科外の体育: 学校の体育・スポーツ活動を学び直す』、学事出版、pp. 102-110
- 2) 伊藤嘉人 (2018) 「子どものつまずきとフィードバック」学校体育研究同志会編『スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり』、創文企画、pp. 154-161

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤嘉人 (YOSHIHITO ITO)

岐阜経済大学・経営学部・准教授

研究者番号: 50409299

(2) 研究分担者

なし

(3) 研究協力者

なし